2023 年度名古屋大学学生論文コンテスト

佳作

名古屋大学での空き時間における低年次学生の居場所の実態と理想

文学部 1 年　藤井 和奏

名古屋大学での空き時間における低年次学生の居場所の実態と理想

1. 調査の背景と目的

大学生活は、高校までの学生生活とは異なり、自分で時間割を編成し空き時間の使い方も自由に決めることができる。では、自由度の高い空き時間を居心地よく過ごすことができる大学キャンパス内の場所はどこなのであろうか。こうした空き時間を過ごす環境を整備することで、キャンパス滞在時間が増加し、学生の交友関係の構築をスムーズにさせたり、授業時間外の学習時間が増加したりすると考えられる。よって、空き時間について調査することには、キャンパス整備のための情報収集としての意義が認められる。また、名古屋大学では、所属学部によって設備の充実度に差があるという実感があり、所属学部の違いによる学生の居場所のニーズの共通点・相違点や、それぞれの学部（地区）においてどのように空き時間を過ごすのかという点も、キャンパス整備のための基礎資料になると考えられる。

水野（2008）によると、女子学生は男子学生よりも、公的な空間での癒され度が高いが、出入りの多い空間では癒され度が低いと言及している。また、女子学生の友人関係は閉鎖的であるため、窮屈さを感じた時に１人でいたいと感じやすくなる可能性も示唆された。そのため性差が異なっても個人やグループのニーズにあった空間を確保するために、物理的な空間を増やす必要があるとのことだった。このように、女子学生には出入りの少ない落ち着いた公的空間が好まれるといったように、性差による居場所のニーズの違いがあると考えられる。また、都筑（1998）によると、居場所として、サークルの活動場所やゼミ、サロン（学生相談室に設けられている）などが主に考えられるが、学生たちがたむろして自由に話せる空間が少ないと、学生食堂や共同研究室、外のベンチが使用される傾向がある。このように、キャンパスの中で自由に友人と気軽に会話ができる居場所に対するニーズが高いことから、大学はより戦略的に学生にとって居心地の良い居場所を提供することで、学生のキャンパス滞在時間を増やし、交友関係の構築が円滑になったり、授業時間外の学習が促進されたりするのではないかと考えられる。このように大学内の学生の居場所についてニーズに対応した空間を提供することの重要性についても明らかにされているが、具体的にどのような学生のニーズがあるのか、また学生の所属学部によってニーズに差があるのかは先行研究では言及されていなかった。

一方で、キャンパス滞在時間等については次のようなデータがある。2023 年 3 月 1 日に発表された全国大学生活協同組合連合会が行った第 58 回学生生活実態調査によると、コロナ禍後の 2022 年度のキャンパス滞在時間は、対面授業の拡大によって 6.5 時間（前年＋0.6・2020 年＋1.3 時間）となったが、コロナ禍前の 2019 年（7.4 時間）より約 1 時間減少していた。

コロナ禍後でキャンパス滞在時間は増加したが、コロナ禍以前と同水準まで回復しているとは言い難い状況であることが分かる。また、大学生活で現在最も重点をおいていることは、「勉学や研究」30.3%、「よき友を得たり、豊かな人間関係を結ぶこと」15.7%、「ほどほどに組み合わせた生活」15.7%と続いた。大学生活において、勉学を重要視しているのに加えて、人間関係の充実やそれらのバランスのとれた生活を求める傾向にある。加えてサークル・部活動等への所属・加入率は58.4%でコロナ禍前（2019年）の9割にとどまっている。サークル・部活動の所属率はコロナ禍後も回復しきらず、その重要度はコロナ禍前より低下したと考えられる。このようにキャンパス滞在時間、サークル・部活動等への所属率はともに低下していることや学生が大学生活で重点を置いていることについては言及されている。しかしながら、この調査からはコロナ禍後に入学した低年次学生にとってのキャンパス内の居場所についての具体的な言及は見られなかった。

そこで本調査では、コロナ禍後に入学した名古屋大学東山キャンパスの低年次学生にとっての空き時間における居心地が良い場所を明らかにするため、名古屋大学の複数の学部の低年次学生にインタビュー調査をすることとした。なお、3 年次以降はゼミや研究室に配属され、居場所となる拠点があるのではないかと予想したため、今回の調査では、所属場所が決まっていない低年次学生（1、2年生）に対象を限定し、調査を行った。加えて自由に時間割を編成でき、空き時間の使い方の自由度が高いという、高校までの学生生活とは異なる大学生活の特徴を踏まえ、授業時間やサークルなどの特定の活動時間を除く“空き時間”に焦点をあてて調査することとした。なお、本論文では、履修していない授業の枠の“空き時間”については、“空きコマ”と呼称する。

そして筆者は、大学は自分で授業を選ぶことができるため、固定された友人関係というよりは授業で出会った人と一時的でときに表面的な交友関係を持ち、授業が終われば 1 人で過ごすことが多いのではないかと考えた。そのため普段一緒に行動する友人よりも長い間同じ時間を共有する部活やサークルの友人と深く交流があり、その活動場所が居心地の良い場所となって、活動時間外でも滞在する“たまり場”になるのではないかという仮説を立てた。

以上を踏まえ、本調査では、学生の所属学部による居場所のニーズの差異や、所属学部を超えたニーズの共通性について特に注目しながら、名古屋大学東山キャンパスにおける低年次学生にとっての空き時間の居心地が良い場所はどこかについて明らかにすることを試みる。

2.　調査方法

2.1　調査方法

今回の調査では、名古屋大学の低年次学生6名を対象とした。インタビューは2023年11月21日から12月2日の間、筆者と調査協力者である学生の1対1で実施した。インタビュ

一時間は1名につき約50分とし、事前に定めた質問項目に沿って半構造化インタビューを実施した。対象者は、名古屋大学の低年次学生のうち、文理医系を含め、所属学部に偏りが出ないよう、異なる学部に所属する学生を選択した。調査対象者の背景は次の表1の通りである。筆者を通じて、該当する学生に対して調査目的を説明し、協力に承諾した学生6名に対してインタビューを実施した。インタビューに際して、研究目的、概要、個人情報の取り扱い、結果の公表の際には個人が特定されない形で行うこと等について説明し、協力者より同意を得た。

表1 調査対象者の背景

対象者	性別	学部・学年	1週間当たりの授業数（2023春/秋）	サークル・部活	活動拠点
A	女	教育学部1年	対面10遠隔3/ 対面15遠隔2	運動部	東山南部地区
B	男	文学部1年	対面14遠隔2/ 対面6遠隔0	運動部	東山南部地区
C	女	工学部1年	対面11遠隔5/ 対面16遠隔2	雑誌製作サークル	東山北部地区、南部地区
D	女	法学部2年	対面11遠隔0/ 対面12遠隔0	雑誌製作サークル	東山南部地区
E	男	医学部医学科1年	対面14遠隔2/ 対面16遠隔2	医学部限定運動部	東山南部地区、北部地区、鶴舞
F	女	経済学部1年	対面13遠隔2/ 対面16遠隔0	イベントサークル	東山南部地区

注）東山＝東山キャンパス、鶴舞＝鶴舞キャンパスの略。

インタビューでは、「大学内の心理的な居場所とは何か」、「大学内の空き時間での居場所はどこか」、「友人の定義とは何か」、「空きコマに対してどんな捉え方をしているか」、「空き時間の充実にはどんな場が必要か」、「空き時間の充実度を上げることにどんな意味があるか」等に関する質問を行った。ただし本論文では、“心理的な居場所”とは物理的な場所を持たない集団への所属などを指すことと定義する。なおインタビュー協力者には、授業時間割やサークル・部活への加入、アルバイトの実施状況、通学時間等、協力者の背景に関する事前ア

ンケートを実施し、対象者の属性を把握するように努めた。

インタビューで得た結果の記録を基に、それぞれの発話を意味のまとまりごとに分けたうえで通し番号を付し、その発話の内容を簡潔に表現するラベルを付した。そのうえで、関連するラベル同士をまとめるカテゴリを付した。ラベルおよびカテゴリの作成は、名古屋大学に所属する 2 名の教員と筆者の間で協議し、カテゴリ間の関係性も含めて、3 名の見解が一致するまで、インタビュー記録を参照しながら見直しを行った。

3. 調査結果

以上の分析の結果、①現状の空き時間での居場所、②理想の空き時間を過ごす場、③空きコマに対する意識、④居心地が良いと感じる瞬間と居場所、⑤空き時間の充実度を向上させることの意味、という 5 つのカテゴリが見出された。この 5 つのカテゴリごとに、どのような発話によって、何が明らかになったかを記述していく。

3.1 現状の空き時間での居場所

「現状での空き時間の居場所はどこか」「そこで何をしているか」と尋ねたところ、表 2 のような回答が得られた。

表 2 の通り、どのようなときでも居心地の良い 1 つの居場所を見つけている場合と居心地の良い場所はあるが 1 人でいるかグループでいるか等の条件によって場所を使い分けている場合と特定の場所を決めていない場合の 3 つの場合があることが明らかになった。具体的には、次のような回答があった。

まず、1 つの居場所を見つけている学生 A は、「友人たちと話しながら課題をやる。でも途中から話すのに夢中になったり、昼寝をしたりしてしまう。効率は良くないが居心地が良く楽しい。偶然通りかかった同じ学部の知り合いと軽く話すなど新しい出会いもある。」と回答した。また、作業効率が良くないことについて詳しく尋ねると、休憩室にいるときよりも、休憩室が空いていないため中庭のテラス席に移動したときのほうが、課題が進まないという傾向にあった。屋外は友人と過ごす際には快適であっても、自習をするには不向きであることが明らかになった。

一方で、1 人で過ごすときと友人グループで過ごすときとで場所を使い分けている学生もいた。例えば学生 B は、1 人で利用する際の場所について「周りも勉強目的で来ているので、静かな環境で 1 人で集中できて居心地がいい。」とのことだった。またグループで利用する際の場所について「勉強したり話したりできる場所なので、友人に相談したり話し合ったりしながらやりたい課題をやるときに行く。」と回答した。学生 D、E も、学生 B と同様の回答であった。加えて学生 D は、友人たちとグループで自習をする場合について、「事前に友人たち

と勉強する約束をしている場合は、図書館 3 階のラーニングポットを予約する。確実に席が取れるし、個室だから少人数のグループで気兼ねなく過ごせる。2 階のグループで話せるラーニングコモンズでもいいけど、コンセントがない席が多いからしっかり自習をするには心もとない。」と回答した。確実に席が確保でき、自習のための環境が整備されていることも重要であると明らかになった。

表 2　学生の空き時間の居場所と条件

対象者	空き時間の居場所	条件	現状の居場所に対する考え
A	教育学部棟 1 階休憩室の大きなソファー席、休憩室に隣接する中庭	言及なし	大いに満足 1 つの居場所を見つけている
B	全学教育棟 2 階セミナーラウンジ 全学教育棟 1 階服部ホール	1 人で利用。 グループで利用。	満足 場所を使い分けている
D	全学教育棟 1 階服部ホールのカウンター席、図書館の 2 階の自習スペース 図書館 3 階のラーニングポット	1 人で利用。 グループで利用。	やや満足 場所を使い分けている
E	図書館 4 階の個室 NIC（ナショナル・イノベーション・コンプレックス）のラウンジ	1 人で利用。 1 人でもグループでも利用。	満足 場所を使い分けている
F	図書館 4 階の個室、全学教育棟 1 階服部ホールのカウンター席 図書館 2 階のラーニングコモンズ、図書館の発話禁止フロア	1 人で利用。 グループで利用。	やや不満足で模索中 場所を使い分けている
C	不特定。空き教室が多い。	グループで利用。	物理的な場所は気にしていない。

しかしながら、特定の場所にこだわりがない場合もあった。学生 C は、「場所は特に気にしていない。基本的に授業後そのままその教室に残るか、次の授業の教室に行くが、仲の良いいつものメンバーで一緒にいられる場所なら外のベンチとかでもいい。授業がほぼ同じなので、同じ学部の友人たちといつも一緒に行動する。友人と話すのがメインで、おまけで課題

もやる。」との回答を得た。課題よりも友人と過ごせることを優先する場合、どこにいるかよりも誰といるかを重要視する傾向にあった。

一方、居心地の良い場所を求めて模索中の学生のインタビューからは、居心地が良くない場所の条件についても回答が得られた。学生Dは、「文系総合館の自習室は、比較的大人数のグループ活動など目的をもって使う会議室というイメージで、1人で自習をしたり、少人数グループで使ったり個人的に使うのには不向き。また、部屋数が少ないから、わざわざ移動してきた割に部屋が空いてない可能性が高い。部屋も微妙に寒く、環境が整っていない。」と回答した。学生Fも、学生Dと同様の理由で、居心地が良いと完璧にいえる場所が見つからず、自習場所を探して転々としているとのことだった。以上から、居心地が良くないと感じる原因は、室温などの環境が整備されておらず自習の妨げになることや様々な規模のグループでの利用に対応できないこと、わざわざ移動してきても席が空いていない可能性が高いことにあると明らかになった。

3.2　理想の空き時間を過ごす場

次に「空き時間を過ごす際、どのような場所が理想的か」と尋ねたところ、以下のような回答が得られた。学生Dは、「1人で作業してもいいしみんなで話してもいいし飲み食いしてもいい場所が欲しい。カフェでもいいけど、絶対何かしら買わないといけないから、椅子と机が置いてある出入りが自由なスペースだけで十分。」と回答した。他の学生5名からも学生Dと同様の回答が得られた。加えて学生Bは、「屋内で勉強目的のみでなく気楽に話せる場所が欲しい。ベンチなど建物の外にはあるけど、気候に左右されない屋内にそういう場所が欲しい。」と回答した。

このように気楽に自習、発話、飲食ができる場所が欲しいという声がインタビューした6名全員から寄せられた。3つの要素のどれかが満たされている場所は多く整備されているが、すべてをバランスよく兼ね備えた「ラフ」な場所はなかなか整備されていないようである。またグループで過ごせる場所と1人で静かに集中できる場所の両方が求められていることが明らかになった。加えて自習や友人との会話を快適にできるように空調の管理がされている屋内にそのような居場所があることも大切だ。

また学部棟の中で居心地が良い場所はないかと尋ねたところ、学生Fは、「経済学部の中に落ち着ける場所はあまりない。椅子や机が置いてあるが、3、4年生のゼミがある人たち用なのか1年生が使ってよさそうな雰囲気ではない。」と回答した。学生Eは、「各学部棟には居場所があるのかもしれないけど、医学部の本拠地は鶴舞キャンパスだから東山キャンパスには拠点がない。学部関係なく利用できる全学教育棟で居心地の良い場所が欲しい。」と回答した。学生Dは、「法学部は学部棟の中に椅子と机がないので、自分の行動範囲内に発話や飲食

が可能な長時間作業ができる場所があるといい。」とのことだった。このように教育学部など十分な休憩室が整備されている学部もあれば、だれもが利用できる机と椅子がない学部も多い。また、各学部棟や全学教育棟など自分の行動範囲内に居場所となるスペースを求めていると考えられる。

3.3　空きコマに対する意識

空きコマに対する意識について尋ねたところ、学生Aは、「空きコマはあってもうまく活用できないと思い、意識してできる限り作らないようにした。課題をやらず、しゃべったり寝ちゃったりする。終わらなかった課題は家で切羽詰まって1人でやる。でもその友人たちと“一応課題している”時間がすごく楽しい。」とのことだった。

学生Cは、「家では極力課題をやりたくないので、1コマ分くらいは課題を進める用としてあってもいい気もする。でもバイトや遊びに充てるため学校外でまとまった時間が欲しいから、学校の滞在時間を短くするためやっぱり空きコマは必要ない。」と回答した。学生Dも、同様の回答であった。学生C、Dはまとまった時間が欲しいため空きコマは必要ないとのことだった。

学生Fは、「もし空きコマが作れるとしても、後々単位数が必要になってくるなら空きコマにせず授業を受ける。」と単位数を重視しているようだった。

一方、学生Bは、「わざわざ空きコマを作ったわけではなく、必要な最低限の単位と自分が興味のある授業だけに絞ったら空きコマが沢山できた。期末レポートなどは家でやるが、日々の授業の予習復習などの課題は、大学の空きコマで終わらせるようにしている。」と回答した。また学生Eは、「面白そうな授業があれば必修じゃなくても取るし、興味がそそられないなら空きコマにして課題や友人と遊ぶなどして時間を有意義に使いたい。」と回答した。このように学生B、Eは単位数よりも自分の興味を優先し、空きコマを有効活用していた。

以上のことから、空きコマは必要ないと考える理由には、有効活用できない、まとまった時間が欲しい、取れるうちに単位を取りたいなどが挙げられる。一方空きコマがあってもよいと考える理由には、最低限の単位数は確保するが、できる限り自分の興味のある学問分野のみを学びたい、その分空きコマを有効活用したいなどが挙げられた。

3.4　居心地が良いと感じる瞬間と居場所

「居心地が良いと感じる瞬間はいつであるか」について尋ねたところ、一番多かった答えは部活・サークルであった。その理由として、学生A、Eは部員同士の仲の良さ、学生B、Dは同じ目標に対し、思いをひとつにしている仲間意識があること、学生Eは共通の趣味について話せること、学生Fは個人的な相談もしやすい環境であること、学生D、Fは一緒に過ごす

時間が長いことを挙げていた。一方で「部活・サークル活動の拠点は居心地の良い“場所”になるか」について尋ねると、多くは活動時間外の空き時間にたむろするような居場所にはならないとの回答を得た。この要因としては、学生 A、B、E からは上の代が使用していたり、物置になっていたりしてたむろできるような部室がないこと、学生 D、F からは活動形態が対面とオンラインの両方を使用しているため、物理的な拠点に固執していないことが明らかになった。

このように部活・サークルは心理的な居場所とはなりうるが、あくまで活動の一環や部員と過ごすことで感じられるものであり、活動場所の拠点自体に居心地の良さを感じているわけではないことがわかった。

一方、同じ学部のいつも一緒に行動する友人たちと過ごす時間も居心地が良いと感じる学生が多かった。インタビュー対象者の 6 名中 5 名が学部の友人の重要性について言及し、そのうち 4 名が固定メンバーで行動していた。例えば学生 A は、「授業がほとんど同じなので、学校で 1 人になる瞬間はない。」と回答した。学生 B は、「大学は今までの学生生活と比べて、深い人間関係を築くのが難しいと思う。そんな中友人として一緒に行動してくれる相手には、心理的にも落ち着く。」と回答した。人間関係が希薄になりやすい大学生にとって、気楽に過ごせる相手の存在はかなり重要であると考えられる。また医学部医学科の学生 E は、「東山と鶴舞のキャンパスでも、大半の授業が医学部生のみで構成されるので、同じ高校出身で一緒に医学部医学科に入学した友人たちと、いつでも一緒に行動する。」と回答した。医学部生は東山キャンパスに拠点がないが、同じ学部の友人同士で強い結束力を持ち、心理的な居場所を作り出していると考えられる。

このように大学は高校までの学生生活とは異なり、自分のクラスの教室という物理的拠点がなく、クラスに帰属すべきという拘束力がないため、同じ学部の信頼できる友人と過ごすことで、心理的な居場所を確保していると考えられる。

3.5　空き時間の充実度を向上させることの意味

空き時間の充実度を向上させることの意味について尋ねたところ、学生 A は、「大学生活は忙しいので、空き時間に効率的にやるべきこと終わらせて、空いた時間は他の遊びなどに充てられるといい。でも友人たちと話しながら課題をやってあまり課題が進まないという現状も楽しいから満足している。」と回答した。学生 C も、学生 A と同様の回答であった。このように学生 A、C は、理想的な過ごし方ではないが、友人と過ごす現状の空き時間に満足していた。

学生 B は、「大学は高校などと比べて、交友関係を深めるのが難しいと思うので、空き時間に気楽に話せるような場所があることによって、すでに仲がいい人と話すだけでなく、親密

でない人とも話すことができて、より仲を深められれば、もっと充実した大学生活になると思う。現状は、一緒に行動するグループや部活の仲間などコミュニティに属していると実感できるから、それなりに充実していると思う。」と回答した。コミュニティに属しているという安心感を充実感と考える学生 B にとっては、空き時間での友人との交流で仲を深めることが重要であるようだ。

学生 D は、「大学の空き時間でやるべきことをやるのが、家でやるよりも効率がいい。その分、家でまとまった時間が取れるので、睡眠や自分の趣味の時間に充てられる。」と回答した。学生 F は、「あっという間に大学生活は終わると思うので、効率的に過ごす必要がある。課題は学校で終わらせたいので、授業よりも早く来て自習をしている。」と回答した。学生 D、F は、大学での空き時間を有効活用して、自分が理想とする効率的な過ごし方を実現していた。

学生 E は、「勉強の息抜きとして空き時間は重要だが、現実は空き時間も課題をやらないと成り立たない。」と遊びたいがやるべきことがあるというジレンマを抱えていた。

このように限られた大学生活を効率よく過ごすために課題を空き時間にするべきだと考える学生が多い。しかし同時に親しい友人と過ごす時間も大切にしており、その結果、やるべきことよりも友人との時間を優先する場合や両立ができている場合、やるべきことに友人との時間を侵食されている場合に分かれているようだ。

4. 考察

本論文では、普段一緒に行動する友人よりも長い間同じ時間を共有する部活やサークルの友人との交流が深いため、その部活やサークルの活動場所が居心地の良い場所となって、活動時間外でも滞在する“たまり場”になっているのではないかという仮説について、インタビュー調査に基づいて検討した。

しかし、「④居心地が良いと感じる瞬間と場所」の結果より、部活やサークルは心理的な居場所にはなりうるが、物理的な居場所にはなりえないことが明らかとなった。また「⑤空き時間の充実度を向上させることの意味」からわかるように、多忙な日々を送る大学生は限られた時間を有効活用する必要があるため、友人とたむろし、ただなんとなく楽しいだけの空き時間ではなく、課題などを効率よくこなす空き時間にしたいという傾向が強いことが明らかとなった。しかし同時に、勉強ばかりで息抜きがないと空き時間が本当に充実しているとはいえないと考えていることも窺えた。自分のやるべきことを進めつつ、友人と話したり相談し合ったり、その場で飲み物や軽食をとりながらリラックスして過ごしたりできる自由度の高い場所が空き時間を充実させるうえで必要なのではないだろうか。

また、「②理想の空き時間を過ごす場」によると、忙しい大学生にとっては居心地の良い場所の条件を満たす場所の存在だけでなく、それが自分の行動範囲内にあることが重要である

と明らかになった。「④居心地が良いと感じる瞬間と居場所」の結果によると、同じ学部の学生はほとんど一日の行動予定が同じで一緒に過ごすことが多い傾向にあった。以上を踏まえると、やはり各所属学部の建物の中や近くに居場所となる場所を設置することが重要である一方、東山キャンパスに拠点を持たない医学部学生もいることから、所属学部に関係なく利用できる全学教育棟や図書館などにも居場所を確保するべきだと考える。加えてタイムパフォーマンスを重視する大学生にとって、時間と労力をかけて移動したのに空席がない場所は居心地が良いとは言い難いため十分なスペースの確保も必要だろう。

一方で、「1.調査の背景と目的」で言及したように、水野（2008）は女子学生の友人関係は閉鎖的であり、窮屈さを感じた時に 1 人でいたいと感じやすい可能性があるため、個人やグループのニーズにあった空間を増やす必要があるとされていた。しかしながら、今回のインタビュー結果によると、学生の友人関係は性別に関係なく比較的閉鎖的な傾向が見られた。今回は水野が言及した「窮屈さを感じる」という回答はなかったが、「1 人で作業に集中したいときがある」という回答は見られた。学生の多様なニーズに対応するために空間を増やすことには限界があるだろうが、同じスペースの中でゾーンを分けるなど 1 人でもどのような規模のグループでも利用できる場を作るといったように多様な物理的環境の整備にも留意していく必要がある。

5.　まとめ

文系である筆者は、普段から文系地区の設備が不十分であることに不満を抱いており、理系の学生は空き時間を過ごす“居場所”には困っていないと思っていた。しかしインタビューの結果、学部に関係なく低年次学生に必要とされている居場所像は共通しており、設備が整っていると思われる理系地区でさえ、自分が活動する建物内にスペースがないと遠いと感じるとのことだった。大学生の効率重視の傾向は、筆者が思っていたよりもかなり強いことに驚いた。

また調査をする中で、「plugin lab 名古屋大学：旧 HELLO,VISITS 名古屋大学（通称：ハロビ)」について言及する学生もいた。なお「plugin lab 名古屋大学」は名古屋大学北部地区にある会員制の共創ラウンジであり、大学生が自習やグループでの話し合い等に利用できる。また無料でドリンクや Wi-Fi、充電コンセントなどが利用でき、作業に適した環境が整えられている。しかしながら理系学生 C からは、「授業の講義棟の建物からわざわざ移動するのが面倒。出入り自由で気軽に使える場所が欲しい」、文系学生 D からは、「ハロビは理想的な場所だが、自分の行動範囲から遠い」との回答を得た。このように居心地の良い場所の理想的な条件をほとんど満たす場所であっても、学生の行動範囲から離れており気軽に利用できない場所は多くの学生にとっての居場所とはなりえないと考えられる。

ただし、今回のインタビューは、文系学生を調査対象の主とし、理系学生を比較対象としたが、理系学生が東山キャンパスを拠点としない医学部学生と物理的な場所にこだわりがない学生の 2 人であったため、多くの理系学生がどこで空き時間を過ごしているかのデータが不十分である可能性が高い。普段から学内に物理的な居場所の拠点を持つ理系学生に対しても調査を行うことが今後の課題である。また、インタビュー調査で得られたカテゴリについて、その関連性までは考察できていないことも今後の課題である。

今回の調査によって、空き時間に居心地の良い場所には、「自習、発話、飲食ができる自由度の高い場所」「1 人でもどのような規模のグループでも利用できる場所」という 2 点の特徴があることが明らかになった。この 2 点を参考にし、学内に学生の居場所となるスペースが増えたならば、筆者自身も含め多くの学生たちの大学生活がより充実したものになるであろう。

［参考文献］

水野邦夫（2008）「小規模大学におけるキャンパス内の「癒し空間」としての居場所の意義について」『聖泉論叢』15, pp.111-123.

都筑学（1998）「キャンパスにおける大学生の居場所：郊外型のマンモス私大における分析」『日本青年心理学会大会発表論文集』6, pp.36-37.
https://doi.org/10.20688/jsyapp.6.0_36

全国大学生活協同組合連合会（2023）『第 58 回学生生活実態調査概要報告』.
URL https://www.univcoop.or.jp/press/life/report.html （最終アクセス 2024 年 1 月 5 日）

plugin lab「about プラグインラボとは」
URL https://plug-in-lab.com/about/ （最終アクセス 2024 年 1 月 10 日）